

文・大森ヒデノリ

リルヴァーレンの妖精の踊り Älvdans på Lillvallen

ヘルシングランド地方のデルスポで伝承されているポルスカ (polska)。近代ヘルシングランド伝統音楽は、戦時中にヘルシング連隊によってストックホルムから持ち帰られた芸術音楽がルーツとなっているものも多く、この曲もエッセル Karl Michael von Esser (1736-1795) 作曲のポロネーズがベースになっている。Älvdans (妖精の踊り／川の踊り) は、朝夕の牧草地や湖沼上で局地的に霧が発生する気象現象で、妖精が輪になって踊っている姿だと信仰されてきた。ニルス・ブローメル《草原の妖精たち》を想起させる。

ネッケンのポルスカ Polska från Västergötland (Näckens polska)

当時忘れ去られようとしていたヴェステルイエートランドの伝承音楽を後世に残すために、アフセリウス Arvid August Afzelius (1785-1871) らによって収集された1曲。1814年に出版された『スウェーデンの民族舞踊の伝統 Traditioner Svenska Folkdansar』の第4集・第16曲として収録されている。北欧民話に登場する水の精霊「ネッケン」をテーマにしたこのメロディは、楽曲の後半に（聴く者を誘惑するような）印象的なリフレインを伴うのが特徴で、ヴァリエーションが各地で伝承されている。アーンシュト・ヨーセフソン《水の精 (ネッケン)》を想起させる。

ベルマン：《フレードマンの書簡集》より羽の生えた蝶が

“Fredmans epistlar” - 'Fjäriln vingad syns på Haga'

18世紀の宮廷詩人・作曲家、カール・ミカエル・ベルマン Carl Michael Bellman (1740-1795) が1791年に出版した『フレードマン歌集』の第64曲。ストックホルムのハーガ公園に建設中のグスタフ3世の未完成の宮殿と美しい自然環境を称えたものになっている。ベルマンは金属弦6コースのシトリンシェン (Cithrinchen) という鐘型ボディーのシターン (Cittern) で自らの詩を弾き語っていた。スウェーデンでは近代以降もリュートやシターンが独自の進化をとげており、アンデシュ・ソーン《故郷の調べ》では、ソーンの故郷であるムーラの民族衣装を纏った少女が「スウェーデン・リュート (Swedish lute)」を弾き語る様子が描かれている。

ロリックのポルスカ Lorikspolskan från Orsa

ダーラナ地方、ウッシャのフィドル奏者、「ロリック」ことローン・アンデシュ・エルション Lorn Anders Ersson (1846-) のポルスカ。酒に溺れて教会の窓を割ったり、役人に暴言を吐いた罪で告発されるなど、この町での悪名が高く、その後この地を離れ、26歳の時にニューヨークに移り住んだと記録されている。

2つの行進曲 Myrslättermarsch efter Olof Jönsson - Gösen

Myrslättermarsch : 1935年のインタビューの中でヘリエダーレン地方、ウーヴァベリのピーパ

(pipa) 奏者、ウーロフ・ヨンソン (1867–1953) は故郷での沼地での干し草刈り (Myrslåtter) について語っており、このゴングロート (gånglåt) は、遠征の際に道中でよく演奏されたもの。

Gösen：セーデルマンランド、ネルケ、ヴェストマンランドの三地方に接するスウェーデンで第四の面積を有するイエルマレン湖に生息するイエース Gös (パイクパーチ) という大型の淡水魚にちなんだゴングロート。

ヴェストマンランド地方に広がる湖沼や湿地帯の情景を、オーロフ・アルボレーリウス《ヴェストマンランド地方、エンゲルスバリの湖畔の眺め》の中に伺うことができる。

オッフエルダールスピーパ Offerdalspipa による演奏。

ヒア・ヒア、お義母さん Hia hia svärmor

オリジナルは 1951 年にキルナのラジオ局で録音された歌より。ウーロフ・ヨンソンが若い頃に老人から夕食と引き換えに習ったもの。

モンマルカピーパ Månmarkapipa による演奏。

ヴォーの森の坂道～エニシダの花 La Montée des bois de Vaux - Flour de ginesto

ヴォーの森の坂道：ブルゴーニュ地方のモルヴァンに伝わるフィドラーの行進曲をルーツにもつ、ハーディ・ガーディ (vielle à roue) の定番曲。

エニシダの花：パリの SP レコード・蓄音機メーカーであるパーフェクタフォン (Perfectaphone) によって 1920 年頃に録音された、ブキャテル Antoine “Bousca” Bouscatel (1867–1945) によるミュゼット・パイプ (cabrette bagpipe) の演奏より。カントループが故郷の民謡を編曲した『オーヴェルニュの歌』第 4 集・第 2 曲「糸紡ぎの娘／花咲くエニシダ (Lo fiolairé / La floraie)」にもそのモチーフが垣間見られる。

「バグパイプの王」と称されたブキャテルのように、オーヴェルニュ地方の多くの農場労働者とともにパリに移住したハーディ・ガーディやフィドル弾きたちは、バル・ミュゼット (Bal Musette) とよばれるダンス酒場で演奏し人気を博すようになる。ヒューゴ・ペリエルが描いた《モンマルトルの小径》を抜けると、週末の夜には、これらのメロディを耳にできたかもしれない。その後、イタリアで人気のあったアコーディオンが持ち込まれパリ・ミュゼットの主演となっていく。

かとうかなこ：昇らない太陽

2016 年に北欧の極夜をイメージして作曲されたワルツ。一年で最も夜が長いルシア祭も、その日を境に少しずつ昼が長くなっていくことを祝う意味合いがあるように、「昇らない太陽は無い」という祈りや願いが込められている。

グリンズ・ハンスの婚礼ポルスカ Grinds Hans Jässpödspolska från Rättvik

ダーラナ地方のレットヴィークで、セー・イ・ゲー (C i G) の愛称で演奏されているポルスカ。キーリアン・ソル《レットヴィックの夏至祭の踊り》には、この地の民族衣装を纏った村人がパートナーとダンスを楽しむ様子が描かれている。花や葉で飾られたマイストング (Maystong) の下では、フィドル奏者と管楽器奏者が舞曲を演奏している。背景にはシリヤン湖と現在も変わらずその湖畔に建つ教会

(Rättviks kyrka) が描かれ、夏至祭の際にはボートで湖を渡って教会に集まるというこの地の伝統風俗を細やかに表している。

ハヴェロの結婚行進曲 Brudmarsch efter Andreas Lång från Haverö

ピーパ奏者、ヨーラン・モンソン Göran Månsson (1967-) の故郷であるメーデルパッド地方、ハヴェロで代々伝承されてきた結婚行進曲。

オッフエルダールスピーパ Offerdalspipa による演奏。

アレ・メッレル：夏のワルツ Sommalvals

ピーパや自身が開発したマンドーラなどを駆使し、スウェーデン伝統音楽に革新をもたらせたスコーネ地方出身の音楽家、メッレル Ale Möller (1955-) が 1990 年代初頭に作曲したワルツ。

ノーデローピーパ Norderöpipa による演奏。